

小平図書館友の会 会報 28 号



発行日：2012年5月15日

発行者：小平図書館友の会会長 氏家 和正

<http://www4.plala.or.jp/Nori/>

目次

チャリティ古本市報告 1 / 第13回障がい者サービス交流会(名取公子) 図書館に望む障がい者サービス(羽鳥富三) 2 / 図書館の障がい者サービスについて(窪田英貴)
INFORMATION1. 「川本三郎氏講演会」 3 / 緑陰読書・オススメ本 INFORMATION2. 「文学散歩へのお誘い」 4~5 / 会員通信「ツキミソウ」(池田春寿) 「待つ力」(横山千都子) 6 / 学習会報告・YAを楽しむ会(重村ヒロミ) 図書館について学ぶ会(加藤裕史) 7 / 読書サークル・小平(島 正夫) 声に出して本を読む会(雑崎亮平) 図書館協議会報告(伊藤規子) 8

.....

3月24、25日、チャリティ古本市報告

—準備から当日までの風景—

古本市は実施3か月前の世話人会から始まる。前回の記憶を思い出し反省点を踏まえながら今年の知恵を出し合う。その後チラシやポスターづくりを経ていよいよ古本市ウィークに突入する。まずは会場の設営。会員有志のおじさんおばさんが机を運び、並べていく。前回の残本は会員宅からトラックで運び込む。その数四千冊余。とにかく本は重い！が、台車に載せる、運ぶ、下ろす、並べる…を笑顔で頑張る。

受け付けには寄付本がどんどん集まってくる。2、3冊の人から台車で往復する人までいる。いかに大切な本であったかを説明していく人もいる。こちらでも丁寧に受け取る。中には首をかしげる本もあるが、大方は皆さんの気持ちの詰まった寄付本だから雑には扱えない。

会員は自分の都合に合わせてお手伝いにくる。

休憩や昼食時には交流の輪が広がる。差し入れの品々も話題のひとつだ。今回は学芸大3年生のボランティアTさんがプリンを作ってきてくれた！

古本市初日は小雨模様であったため、かえっていつもの混雑が緩和された。2日間ともちょうどいい混み具合で、来場者はじっくりとゆっくりと物色できたようだ。春休みなので子ども連れも見られ、お気に入りの本をしっかりと抱えて帰る子どもの姿は微笑ましい。来場者の男女比は断然男性が多く実用書や専門書、辞書類に人気がある。市民活動ならではの安さゆえ何冊も購入していく人が多く本好きにはたまらない催しとなっている。



集本数 約 16,000 冊 販売数 6,362 冊
総売り上げ 266,390 円 (ここから経費を引き小平市図書館へ物品で寄贈及び被災図書館への寄付)
*残本は来年度ストックと共働学舎への寄付

第13回障がい者サービス交流会

2012, 3, 14 中央図書館視聴覚室

名取公子

出席者 28名 障がい者7名（視覚障がい者6名、統合失調症1名）ボランティア7名（点訳サークルかりん、点字サークルけやき、布の遊具ひまわり、音訳サークルわかば、小平手話サークル、読書ボランティア）ガイドヘルプ2名、図書館職員5名（中央3名、小川西町2名）図書館友の会7名

今回の交流会はサービス利用者7名の参加があり、多様な声が聞けてよかった。

自己紹介では、長く小川西町図書館から「点字毎日」を借りている方から、点字は毎日読まない指先の感覚が鈍るので、その作成に係わっている方々への感謝の気持と点字図書の目録の希望があった。また、視覚障がい者のパソコン教室を、市民活動支援センターで原則として第1、第3金曜日（10時～12時）に行っている、とのお知らせがあった。手話通訳の方からは、「手話」は聴覚障がい者にとっては「言語」である。図書館の分類では「福祉」分野に入っているが「言語」に変更できないかとの要望に、図書分類上無理との回答だった。

次いで渡辺サービス係長から現況報告。

；「ハンディキャップサービスごあんない」をホームページ「利用案内」に掲載した。

日本テレビ「24時間テレビ」より視覚障がい者利用の機器の寄贈を受け、国の「住民に光を注ぐ交付金」でやはり視覚障がい者用機器を購入した。

；昨年夏には都立図書館の対面朗読講習会（全6回）を図書館職員1名が受講した。

；デイジーの操作方法についての講習を中央図書館で行った。

；24年度からは、デイジー図書再生機を2台、障がい者手帳1、2級の人を対象に貸し出す。

；対面朗読のボランティアは朗読経験者を対象に募集する等、多くの進展があった。

最後に質疑応答があった。

；デイジー図書に移行していくようだが利用機器の操作方法が難しく1回の講習ではマスターできないので何回か頼みたいとの要請には、図書館職員が個別に応じるとの回答があった。

；朗読者登録等、今後の予定については、24年度募集、登録、25年度から始動するとの回答に、会場からは24年度、早期活動開始要請の声が多く上がり、結果、図書館から24年度早期に始動するよう再考するとの回答があった。

24年度はサービスのPRと利用者の発掘、デイジー機器利用の拡大、対面朗読ボランティアの育成等、市民の期待は大きい。図書館の努力に期待したい。

（デイジーとは・・・音声録音機器で、テープと比べて劣化がない、長時間録音できる、頭だしが簡単、安い等利点が多い。）



図書館に望む障がい者サービス

羽鳥富三

図書館友の会 障がい者交流会も13回目を迎えた。今年は 視覚障害者が6名も参加していました。

視覚障がい者の読書は 一人一人の見え方・見えにくさで多様な方法があります。点字本 CD・テープ版 各種電子ブック インターネット図書 拡大文字の本 対面朗読等々 読み方も様々です。活字の本が読めなくなってもいろいろな道具を使って読んでいます。テープに代わる daisy 版や 対面朗読は選択肢の一つで 一人の当事者でも状況によって いろいろな選び方で工夫して対応しています。

図書館の業務は障がい者サービスだけではないので、多岐にわたるサービスを職員だけでまかないきれないことは理解します。対面朗読については、従来の社協に丸投げをする姿勢を改め、依頼があれば、即職員が希望のあった蔵書を率先して読むことを基本姿勢とする。その基本姿勢を保ちながら、逐次、図書館の登録ボランティアを育成し、市民の要望に応えるよう努めて頂きたいと思えます。

図書館はあらゆる情報の宝庫です。折角の資源をいろいろな手段で提供する発信基地の役割を持っていることを自覚し、創意工夫で日々の業務に携わって頂きたい。微力ながら、私にできることがあれば、お手伝いさせていただきます。

図書館の障がい者サービスについて

小平市中央図書館 障がい者サービス担当
窪田英貴

平成 23 年度の障がい者サービス事業報告と、平成 24 年度の障がい者サービス事業予定について説明いたします。

まず、平成 23 年度の障がい者サービスでは、24 時間テレビから、障がい者サービス関連機器の寄贈を受けるとともに、デジ再生機やデジタル録音機、デジ図書を購入し、機器の充実を図ることができました。さらに、これらの機器を活用するために、デジ再生機体験会・デジ図書編集講習会を実施しました。

小川西町図書館では、図書館福祉講演会「障がい者の自立と生活を支える介助犬」を開催し、介助犬との生活や訓練方法を、トレーナーの方に実践していただきました。

対面朗読サービスの利用拡大を目的として、中央図書館障がい者サービス担当として、都立多摩図書館で全6回の音訳者講習会を受講しました。受講の感想としては、講習会を通じて、音訳の技術を学んだだけでなく、講習会に参加されていた他市のボランティアの方々が持つ音訳に対する熱意と向上心に、とても驚かされました。改めて、

ボランティアの方々のご協力が、障がい者サービスを支えていることを感じられた貴重な経験でした。

次に、平成 24 年度の障がい者サービス事業の予定として、4月から、デジ図書・再生機の貸出を実施します。また、平成 22 年の著作権法改正により、録音図書の利用対象者が拡大されましたので、小平市でも貸出について見直しをする予定です。

6月には、図書館における障がい者サービスについて理解を深める講演を予定しています。また、対面朗読サービスの充実を図るため、できるだけ早い時期に、経験者を対象とした、音訳ボランティアの募集を行い、環境を整備していきたいと考えております。

小平市立図書館の障がい者サービスは、視覚に障がいのある方や図書館への来館が困難な方に対しても、読書の機会を提供することが役割だと思います。現在ご協力いただいているボランティアや図書館友の会の会員の方々との連携を深め、「誰もが利用できる図書館」のさらなる構築を目指し、サービスの充実を図ってまいります。ご協力をよろしくお願いいたします。

INFORMATION 1. 講演会のお知らせ

川本三郎の「東京町歩き」

映画評論や町歩きなどで有名な川本三郎さんをお招きし、東京や多摩地域の風景、町歩きの楽しさを語っていただきます。



日時 6月9日(土)

午後1時30分～3時30分 開場 午後1時

場所 小平市中央図書館3F 視聴覚室

(西武多摩湖線青梅街道駅 徒歩4分)

入場無料(定員80名) 申し込みは不要、ただし満員になり次第締め切りとなります。

主催 小平図書館友の会

後援 小平市教育委員会

問い合わせ: 伊藤 090-1707-0860



緑陰読書



「オススメ本」紹介します

『アイヌ神謡集』 知里幸恵（ちり・ゆきえ）編訳
岩波文庫（赤 80-1）／ワイド版岩波文庫（317）

知里幸恵（幸恵）は明治36年（1903）、北海道に生まれ、大正11年（1922）9月18日、寄寓先だった東京の金田一京助邸で、心臓麻痺のために十九歳で急逝しました。この薄い文庫は彼女がたった一冊遺した本です。

「神謡」とは、アイヌ民族のあいだで伝承されてきた物語で、「ユーカラ」（カムイ・ユーカラ）と呼ばれています。アイヌの人々は文字を持たなかったため、口伝えに謡い継がれてきました。本来、節をつけて謡うものだったのです。

十九歳の少女は、彼女がよく知っているユーカラの中から13編を選び、ローマ字で音を起こして表記し、日本語の対訳を付けました。

ぜひ、ローマ字表記部分を声に出して読んでみてください。リズムカルでとてもいいのです。日本語訳を読むと、アイヌの人たちの豊かな精神世界が感じられることでしょう。

なお、巻末の解説は、幸恵の実弟である知里真志保（ちり・ましほ、1909-1961、アイヌ語学者）によるものです。（会員 入山弘之）



『プラテロとわたし』 J.L.ヒメネス
伊藤武好・伊藤百合子訳 理論社

「プラテロは、小さくて、ふんわりとした綿毛のロバ。あまりふんわりしているのでそのからだは、まるで綿ばかりでできていて骨なんかないみたいだ。けれどその瞳のきらめきは、かたい黒水晶のカブト虫のよう。」

作者ヒメネスは、この銀色のロバにまたがって、アンダルシアの丘や果樹園を歩きまわった。ヒメネスは、1881年、スペインのアンダルシア地方のモゲールで生まれた。首都マドリッドで詩集などを発表していたが、健康を害し、故郷モゲールに帰ってきた。故郷の田園生活の中で、プラテロに優しく語りかけながら過ごした日々を描いたのがこの散文詩である。モゲールの自然を四季の移ろいと共に、人々の生活にも思いを寄せながら色彩豊かに語る。

学生時代に出会ったプラテロ、時々どこかのページを繰り、懐かしくもいとおいしい世界にひたるのがこの本の喜びである。岩波版もあるが、私は理論社派。長新太の挿絵もまたいい。

（図書館職員 渡辺房江）



『テルちゃん』 玄侑宗久作 新潮文庫

玄侑氏は福島県三春町生まれ。臨済宗の僧侶。「中陰の花」で芥川賞をとった作家だ。

入院中の夫を見舞った帰り、ふと本屋で見つけた「テルちゃん」という題名にひかれ頁をめくった。テルちゃんの本名はエテル。フィリッピン女性、中年の安雄の三番目の妻となった、安雄より二十歳も年下の女性である。義母の面倒をよく見、明るくピチピチした素直なエテルは、テルちゃんのお愛称で周りの人たちになじんでいた。しかし安雄の急死で苦難にたたされるテルちゃん。その荒波をくぐりぬけ、常に満月のようにあたりを照らすテルちゃん。作品は平成23年2月に発行されたものだが、こういう人がいるんだということに勇気もらい、心があたためられた。私事に不幸があった私故、ずい分とこの「テルちゃん」にはげまされた。平易な文章でユーモアのある展開に心のなごむ本である。（会員 川上文子）



『鬼平犯科帳』 池波正太郎著 文春文庫

初めて読んだのは大学生の頃。人間味あふれる登場人物に魅了されました。特に火付盗賊改方長

官である鬼の平蔵こと長谷川平蔵は懐が深く、強く、優しく、厳しく、だらしなく、魅力的でした。自分も平蔵のようになりたいと願ひ、今でも精進し続けています。

ご紹介する作品は「おれの弟」(鬼平犯科帳 18)です。平蔵が立ち寄った料理茶屋で、剣術道場の愛弟子である滝口丈助が人妻と密会しているのを見かける。不審に思い少人数で探索を行うと、翌早朝に決闘の支度をした丈助の姿が。追跡したが、丈助は卑怯にも射掛けられた矢を受け斬死してしまう。この後、人妻との意外な関係や決闘に至る事情が明らかにされますが、政治色の濃い、後味の悪い決着になります。しかし話はそれで終わらずに…。平蔵や周囲の人々の魅力がたっぷり詰まった作品です。(図書館職員 伊藤泰則)



『古墳とはなにか』 認知考古学からみる古代

松本武彦 著 角川選書

前方後円墳という我が国独自の古墳が各地に存在している、しかも箸墓古墳(卑弥呼の墓?)や堺市の大仙陵(仁徳天皇陵)など巨大な構築物である。誰が、どうしてこのような形態を考えたのか? また大工事に使役された人民はどんな思いで仰ぎ見たのか?

認知考古学という言葉は初めて聞いた私にはこんな視点からの古墳研究は極めて刺激的でした。前方部のアプローチから後円部へ駆けあがる曲線を見上げることで亡くなった首長の権力と地位を知らしめ、その巨大さを部族の誇りとしていたという説もなるほどと頷かされる。

従来の唯物論的考古学とは一味違った考古学論として面白く読み終えた。(会員 島 正夫)



『3びきのかわいいオオカミ』

ユージーン・トリビザス文 ヘレン・オクセンバリー絵 こだまともこ訳 富山房

みなさんは「さんびきのこぶた」という絵本を知っていますか? 説明なんかいらないくらいと

ても有名な絵本です。そして、そのパロディが「3びきのかわいいオオカミ」という本です。

絵本の始まりは、おかあさんが3びきのオオカミにこういいます。「さあ おまえたち そろそろひろい せかいに でておいき。かあさんのうちを でて じぶんたちの うちを つくりなさいな。でもわるいおおぶたには きをつけるのよ」

そしてオオカミたちは家を出ていきます。3びきで力を合わせて家を作るのです。原作(?)では最後の砦になるレンガのいえが最初に登場します。悪いおおぶたは、どうやってオオカミたちを追い詰めていくのでしょうか。オオカミたちはつぎにどんな家をつくるのでしょうか。

気になった方は図書館にもありますのでぜひ読んでみてください。(図書館職員 栗城拓也)

INFORMATION 2.

友の会会員対象 文学散歩へのお誘い

調布市仙川の武者小路実篤記念館と実篤公園、晩年の20年を過ごした家

日時 6月24日(日)



京王線仙川の駅を降り商店街を抜けて住宅街をゆっくり歩くこと10分くらいで実篤公園の入り口に着きます。規模としては小さいながらも自然を生かし、土、木々、水の流れが懐かしさを呼びおこす公園です。なだらかな傾斜を利用した実篤の家は「水のあるところに住みたい」という子供の頃からの願いをかなえ、昭和30~51年まで晩年の20年を過ごしました。公園に隣接した記念館では、文学のみならず美術、演劇、思想と幅広い分野で活動した足跡や同年代の文化人たちとの交流も興味を惹かれます。ぜひお誘いあわせの上ご参加ください。

*なお申し込み方法など詳細は交流紙120号、121号(4月、5月号)をご覧ください。

会員通信

<ツキミソウ>

池田春寿

今回大好きな花のことを書く機会を頂き、出会
いから 15 年にして花を想う気持ちを皆さんにお
届けできることを感謝しつつ、今年も純白の花の
咲くのを楽しみにしております。昨年秋口には小
平花いっぱいのに種子を提供して下記資料と共
に希望者に配布しました。全国大会にエールを送
ります。

植物名：ツキミソウ（月見草）学名：Oenothera
tetraptera Cav.

分類：あかばな科 マツヨイグサ属、2年草。

北アメリカ原産。嘉永年間（1851年頃）オランダ
経由渡来。花は純白4弁、径5～8cm。

夕方に咲き翌朝萎んで紅くなる。和名・月見草は
夕方咲く白い花弁を月にたとえたもの。

果実はさく果、4稜倒卵形、水につけると割れて
種がこぼれる。1個に300粒余含まれる。

ツキミソウについて文献では一マツヨイグサ待
宵草などと同じころ渡来したが、弱いため野生化
せず今日では殆ど見られないと「原色牧野植物
大図鑑」にある。また、「四季花ごよみ・講談社」
によれば一江戸時代に渡来、観賞用に栽培され
たが、最近では殆ど見られなくなってしまった。
ところで一般に「月見草」と呼ばれ、また歌にも詠
まれるものは、このほかに～マツヨイグサとオオ
マツヨイグサ～月見草の見られなくなった現在、
月見草といえは黄色いこれらの花・マツヨイグサ
を思い浮かべる人が殆どであろう（原文のまま引
用）。以上専門書といえども正しく伝えられてお
りません。

月見草にとって大変悲しむべきこと、と世の中
に訴えている「月見草は泣いている」（植物春秋、
平成6年7月号より12回連続）の著者・森田淳二
郎氏より、平成9年9月に種子を譲り受け、当時
勤務の財団（港区南青山）の庭に蒔き、翌年5月
連休の頃咲かすことができたのがきっかけでした。

月見草（つきみぐさ、ツキミソウ）、待宵草命名

に関する推考（上記連載第2号参照）：名付け親不
明。渡来直後につきみぐさとして記録に残る。そ
のもとをたどると、平家物語「月見」の段にある
待宵の子侍従の和歌がある。（平家物語・新古今和
歌集収載）

待宵に更けゆく鐘の声聞けば

あかぬ別れの鳥はものかは

待宵の小侍従

そして最近の歌では、平成10年秋、我が家で初め
て咲いた月見草をみて詠む。

夕されば開きゆるなる月見草

その花びらの白ふるはせて

池田フジ子

追記：種子と蒔き方、「月見草は泣いている」写しを希
望者に差し上げます。（先着10名）

6月中に蒔けば10～11月頃には咲き、翌年まで持ちま
す（2年草）。連絡先 池田 電話：042-346-7268

メール：sahaikeda@nifty.com

また追加資料として、森田さんの「月見草は泣きやま
ず」3回シリーズが「平成10年、サカタのタネ」に掲
載されました。



.....

「待つ力」

点訳サークル かりん 横山千都子

人間、歳を重ねると心の角がまるくなるか、は
たまた尖ってしまうか？ 日常生活の流れの中で
何事につけ、早く早くの毎日です。

鷺田清一（臨床哲学）の著で「待つ力」につい
ていろいろな言葉があることを教えられました。
待ちわびて、待ちかねて、待ち明かして、待ちつ
くして…。待ちこがれ、待ちくたびれて、ついに
まちぼうけ、待てど暮らせど待ち人來たらず、等々。
今年の春は天候不順で梅や桜の開花が本当に待ち

遠しかったです。

先日、出先である行列になりました。待つこと10分程です。後ろの80歳代と思われるご夫妻の会話が耳に入りました。夫「待てない」妻「折角来たのよ、来年はもう来られるかどうかわからないから並びましょうよ」夫「…………」。我が夫も待てない人の一人です。「そうだな」と頷いていました。待つ思いは人それぞれですね。

先々に吉兆を見る「待つ力」は強く、大きいものです。多くの人と出会い繋がるボランティア活動をするうちに、「待つ力」と同様「聴く力」も培われていくように思えます。

ゆったりとした時間を持つには読書がお薦めと思ひ、昼下がり遠藤周作の「眠れぬ夜に読む本」を開きました。読み進むうちにうつらうつら睡魔が襲う。効果100%です。この至福の時間にはやはり読書が一番です。点訳ボランティアに通じるものですが、文字の必要性、大切さを痛感しています。

学習会の活動から



YA を楽しむ会

重村ヒロミ

2006年8月に第1回の「YAを楽しむ会」を始めてからもう6年を過ぎ、読んだ本は100冊を超えました。

例会のときに「〇〇の本にこんなことがあったね」とか、お話の主人公の名前がポンポンと出てきたり、ひとしきり以前読んだ本の話に花が咲くことがありました。そこで「このあたりで印象に残った本についてまとめてみようよ」ということになり、「大人にこそ読んでほしいよね」と話はすすみ、「大人が読んで面白いYAの本」と題名が決まりました。

これまで読んだひとつひとつの本について印象に残っていることを改めて語り合い、紹介したい本をピックアップし、それぞれ好きな本について書いてくることにしました。

毎月の例会で読書会の合間に話し合っていたので、

長い時間がかかってしまいました。5月中には印刷・配布できると思います。お楽しみに！

12月から4月までに読んだ本

- 『モンスーン・あるいは白いトラ』
クラウド・コルドン著 理論社
- 『冬の入江』
マッツ・ヴォール著 徳間書店
- 『金色の野辺に唄う』
あさのあつこ著 小学館
- 『アナザー修学旅行』
有沢佳映著 講談社
- 『アンネの日記』完全版
アンネ・フランク著 文芸春秋
- 『ブリジנגアメンの魔法の宝石』
アラン・ガーナー著 評論社

* YAとはヤングアダルトブックスの略です

図書館について学ぶ会

加藤 裕史

課題解決型サービスについて今まで学んできていて、今これまでのまとめをしています。

“課題解決型サービスとは、地域の課題解決のために図書館が資料・知識・情報を提供し、また関連する講演、相談会などを開催するサービスである”（「課題解決型サービスの創造と展開 大串夏身編著 青弓社」より）これを参考にして、最初にビジネス支援サービスについて学ぶことにした。初めにどんなサービスがあるか色々みんなで議論した。そして「ビジネス支援サービス」を新宿区立角筈図書館で行ってきた滑川貴之氏（2010年3月まで角筈図書館でビジネス支援担当）をお招きして話を聞きました。その後、新宿区立角筈図書館見学に行きました。また、ビジネス支援サービス以外に子育て・医療健康・町内会自治会情報等について小平市立図書館にどんな資料があるか調査しました。この学んだことをまとめて、今後どうのようにしていくか考えていきたいです。皆様も、ぜひご参加ください。

読書サークル・小平

島 正夫

第12回 平成24年1月15日

於 中央公民館学習室3（参加者 6名）

課題本 『小惑星探査機はやぶさー玉手箱は開かれた』
川口淳一郎 著 中公新書

感想 小惑星イトカワに到達しサンプルを持ち帰るという世界初の計画を指揮した筆者の感慨が素直に伝わる名著だ。7カ年60億kmに及ぶ長旅と再三訪れる危機をチーム(日本宇宙航空研究開発機構JAXA)の総力で乗り切り見事に目的を果たして我々を感動させた。

第13回 同4月8日

於 中央公民館学習室3(参加者 10名)

課題本 『和本のすすめ—江戸を読み解くために』

中野三敏 著 岩波新書

感想 今回特別参加の大沼清輝氏(慶應大学教授・書誌学)が数冊の「和本」を持参され、実物を手にしながら江戸時代のリテラシーの一端に触れ、専門家の懇切な解説に感激した。

① 江戸幕府の出版規制は治世騒擾と風紀紊乱に限定され逆に出版元の自主規制にゆだねられ、かつ奥付けを必須とした結果から著作権・著作権の保護に繋がる制度が確立された。

② 江戸時代の封建制度が安定していたのは、為政者(上級武士)の成熟した倫理観を信頼し、印刷文化の発達につれて俗の領域が大きく発展したからである。

声に出して本を読む会

雑崎 亮平

五月、小平中央図書館で発表会

昨年末からの活動を振り返りますと、11月18日(金)から20日(日)シラヤアールスペースでの発表会は、さまざまな著作に挑戦した発表者の熱意は、アンケートからそれなりに伝えられた、と受け止めています。3日間、演目を変えての発表は、聴いていただく方々への配慮が充分であったかどうか、ただ目先を追うのでなく、「声に出して」本を読む意義、聴いていただくための基礎的な学習で、今後に生かしていくことになります。特徴的には、第2日の夕刻、白矢先生(医師・会場オーナー)が、音楽会を催され、会員の一人が、飛び入りで「歌唱」を披露させていただけたのも、私どもへの心温まるご配慮だと、関係者一同、感謝しています。

2月5日、小平市虹ヶ丘第一自治会の、「第2回・朗読と落語を聴こう会」で、発表の機会を得ました。こ

れは、風間会長(友の会会員)の肝いりで、地域交流に私たちの朗読を、とお誘いいただき、実現したものです。プロ級の落語家とご一緒に2名が発表、お汁粉まで出る家庭的雰囲気は、みなさんを楽しませました。私たちの活動は、会員の準備さえ整えば、さまざまな機会に交流の場があるものと、意をつよしました。

さて、5月19日の「第6回・ことばの玉手箱」は、小平中央図書館・視聴覚室が会場です。昨年9月、中央図書館職員と図書館友の会との「懇談会」の席上、図書館長から「本に親しむ活動の一つとして、活用してください」とのご提言があつて、実現の運びになりました。内山恵司さん(会員)構成の、「ききみみずきん」は、日頃の対話そのまま、楽しめます。会場でお待ちします。

5月19日(土)午後1時30分から 開場1時
小平市中央図書館3F 視聴覚室 申し込み不要 木下順二「ききみみずきん」江国香織「デューク」宮澤賢治「やまなし」藤沢周平「川霧」潮田伝五郎置文

図書館協議会報告

図書館協議会委員 伊藤 規子

図書館協議会は、2年の任期の半分が過ぎました。今期の研究テーマは、「電子図書館」です。昨年、電子書籍・資料の貸出をしている他自治体の図書館情報をホームページで集めたり、タブレット型のパソコン端末の体験をしたりと勉強してきました。先日は障がい者サービスで活用するデジタイズ機器と図書についての体験学習もしました。

電子書籍自体が、日本ではまだまだこれからという状況です。図書館にとっての電子図書や資料提供をどうしていくのか、手探り状態ではありますが、そろそろまとめに入っていく予定です。

仲町図書館が、平成26年度6月はじめごろに完成の予定ということで休館に入りました。高名な建築デザイナーの設計ということもさることながら、IT関係設備の充実、学校図書館との連携館といった特色にも期待するところが大きいです。今後は、細部について、図書館協議会でも提案をしていくことと思います。